

自然と文明のかけはし・百年の森づくりに向けて



京都市長

梶 宗 頼

「この国 ^{さんがきんたい}山河襟帯にして 自然に城をなす」と、桓武天皇は794年に平安遷都の詔を発せられ、都の末永い繁栄を願い、四方を神に守られた、^{ししんそうおう}「四神相応」の地相を持つ京都盆地に都を移されました。

人々は、三方を山に守られた自然の懷の中で、森林からの恵みを受けて美しい都を築き上げ、その過程において、世界に誇るべき木造建築文化を醸成して参りました。これが山紫水明の都・京都の原点であり、洛中と郊外の自然が密接に関係し、木の文化を基軸として、自然の許容範囲で節度ある繁栄を続けようとする循環型社会の思想が育まれて参りました。

この度策定した「合併記念の森全体構想」は、京北町から引き継いだ約268ヘクタールの市有林を活用し、人と森とのかかわりを京都の木の文化という視点から見つめ直すとともに、現代の人々の森林へのかかわり方の一手法として、市民や企業等が森づくりに積極的に参画することができるシステムを作り上げ、自然と文明のかけはしとなる我が国の新しい森づくりを進めようとするものです。

古来日本人は、身近な自然の造形に宇宙創造の神秘を感じ取り、大自然に対する^{いけい}畏敬の念を抱きながら、自然界の秩序の中で他の生命と共に生かされ、生き続けたいと願い、身近にある山や森、そして大木を神々が宿る神聖なるものとして、祈りの対象としてきました。そうした自然に対する想いや願いは、我々日本人の生き方やものの考え方の基本となっており、現在も1200年の歴史を有する京都のまちに脈々と息づいています。

本市は、平成17年4月の旧京北町との合併により、市域全体の4分の3を森林が占めることになり、改めて現代生活の中で木の文化を見つめ直す好機を得ました。

「合併記念の森」がある京北地域は、桂川の上流に位置し、室町時代初期には造林が始まったという日本でも極めて古い歴史を持つ林業地帯です。この地は、平安遷都以来明治2年(1869年)に^{ごりょう}御料制度が廃止されるまでの長きにわたり、禁裏の^{みそまごりょう}御所御料地として、都の造営や御所炎上の際には、^{おおいがわ}大堰川(桂川)の水運を使い、膨大な量の建築用材を供給してきました。

私は、この京北町との合併を機に、こうした歴史を有する森を通じて、我が国の文化の基点であり、京都議定書の発祥の地ともなった京都から、日本人のアイデンティティーとも言える「自然との共生」の思想を全国に喚起していきたいと考えております。

今後、京都市では、本構想を着実に推進し、将来にわたって人と自然の共生を象徴する「百年の森づくり」を実現して参りますので、多くの皆様の御理解と御協力をお願い致します。

結びに、本構想の策定に当たり、御指導、御協力をいただきました京都市合併記念の森検討委員会の委員、並びに関係機関や団体の皆様に対しまして、厚く御礼申し上げます。